

# 空想の建築

— ピラネージから野又 穫へ —

Imaginary Architecture from Piranesi to Minoru Nomata

## 開 催 要 項

この世にはない建築を空想すること、それは私たちが今、存在している世界とは別の世界を空想し、その世界に形をあたえることかもしれません。だとすれば空想の建築群は、人間のイマジネーションと創造力を駆使して生み出されるもうひとつの世界、〈アナザーワールド〉への入り口ともいえるでしょう。本展ではヨーロッパの古い版画から現代美術へ、時空をも飛び越える〈空想の建築群〉を展示し、世界を空想の建築というかたちで目に見えるものにしようとした人々の系譜をご紹介します。

絵画、立体、版画 … さまざまなかたちで人は現実には存在しない建築を創造してきました。本展では、遙か古代ローマに思いを馳せ、その空想的復元を版画として結実させたジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージや、壮麗なバロック的空間を描いた〈紙上〉の建築家たち、考古学的調査と想像力を駆使して古代エジプトの建造物を描いた18世紀末の絵師たち、そして今まさに創作活動を展開している現代の美術家までをとりあげます。それにより、空想によって構築された建造物の面白さ、美しさを探ります。世界を空想の建築というかたちで目に見えるものにしようとした人々の系譜が浮かび上がることでしょう。

昨年25周年を迎えた国際版画美術館が、新たな飛躍をめざしてスタートを切る2013年春、この展覧会は版画のみならず、絵画や立体、書籍など、変化に富んださまざまなタイプの作品によって、見る者を遥かな世界へと誘うことをめざします。ヨーロッパの古い版画から現代美術まではばひろく〈空想の建築群〉を渉猟する得がたい機会となるにちがいありません。

また本展開催にあわせ、特別展示として、出品作家の一人である野又穫（のまた・みのる）のドローイング展『ELEMENTS-あちら、こちら、かけら』を開催いたします。あわせて、ぜひご観覧ください。

展覧会名	空想の建築 —ピラネージから野又穫へ— 展 Imaginary Architecture from Piranesi to Minoru Nomata		
会 期	2013年4月13日(土)～6月16日(日)	<56日間>	※月曜休館
	※ 4月29日(月・祝日)、5月6日(月・振替休日)は開館 ※ 4月30日(火)、5月7日(火)休館		
開場時間	火～金	10:00～17:00 (入場は16:30まで)	
	土・日・祝日	10:00～17:30 (入場は17:00まで)	
会 場	町田市立国際版画美術館 〒194-0013 東京都町田市原町田4-28-1 Tel. 042-726-2771 Fax: 042-726-2840 小田急線・JR横浜線町田駅より徒歩15分		
主 催	町田市立国際版画美術館		
協 力	小田急電鉄株式会社		
観 覧 料	一 般	800(600)円	※( )内は20名以上の団体料金
	大学・高校生	400(300)円	※小・中学生無料
	65歳以上	400(300)円	
	※展覧会初日=4月13日(土)、開館記念日=4月19日(金)は無料		

同時開催 空想の建築展 関連企画  
『ELEMENTS - あちら、こちら、かけら』 野又穂ドロージング展  
4月13日(土) - 6月16日(日) (常設展示室ミニ企画/入場無料)  
※当館収蔵品ではありません。

#### 関連催事

##### ①柴門ふみ×野又穂スペシャルトーク

5月19日(日) 14:00~15:30

会場: 美術館講堂 定員: 150名

漫画家、エッセイストとして活躍する柴門ふみさんと本展出品作家である野又穂氏による対談形式のトークイベントです。

※町田市イベントダイヤル(042-724-5656)で4月11日(木)正午より受付(先着順)

※聴講無料ですが、企画展観覧の方が対象です。

##### ②館長によるスペシャルトーク 5月5日(日・祝)

##### ③学芸員によるギャラリー・トーク 4月14日、28日、5月12日、26日、6月9日 各日曜日

※②③は観覧券が必要です。いずれも14:00から40分程度。

スタートは2階展示室入り口付近。

##### ④エントランスホールでのプロムナードコンサート 5月3日(金)

演奏: 斎藤 龍(ピアノ)、佐原敦子(ヴァイオリン)、阿部 哲(ヴィオラ)、  
豊田庄吾(チェロ)

場所: 美術館エントランスホール

※13:00と15:00の2回、約30~45分程度の演奏。どなたでもお聴きになれます。

#### ☆美術館で語りあおうトークフリーデー

=会期中の水・土曜日 ※無料日(4月13日)と祝日(5月4日)は除きます。

問い合わせ先 町田市立国際版画美術館 担当学芸員: 佐川美智子 サブ担当: 藤村拓也  
〒194-0013 東京都町田市原町田4-28-1

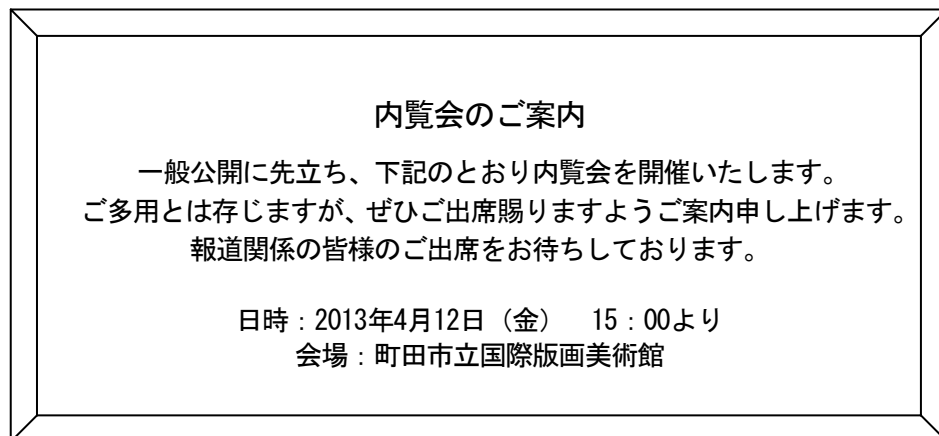
TEL: 042-726-2771(全般) -0860(学芸) Fax: 042-726-2840

Eメール : [bunspo040@city.machida.tokyo.jp](mailto:bunspo040@city.machida.tokyo.jp)

美術館公式サイト : <http://hanga-museum.jp/>

※巡回館なし

主な出品予定作品 絵画、立体、版画、書籍など 約 180 点



\* 読者・視聴者プレゼント用などに招待券、割引券をお考えの場合はご相談ください。\*

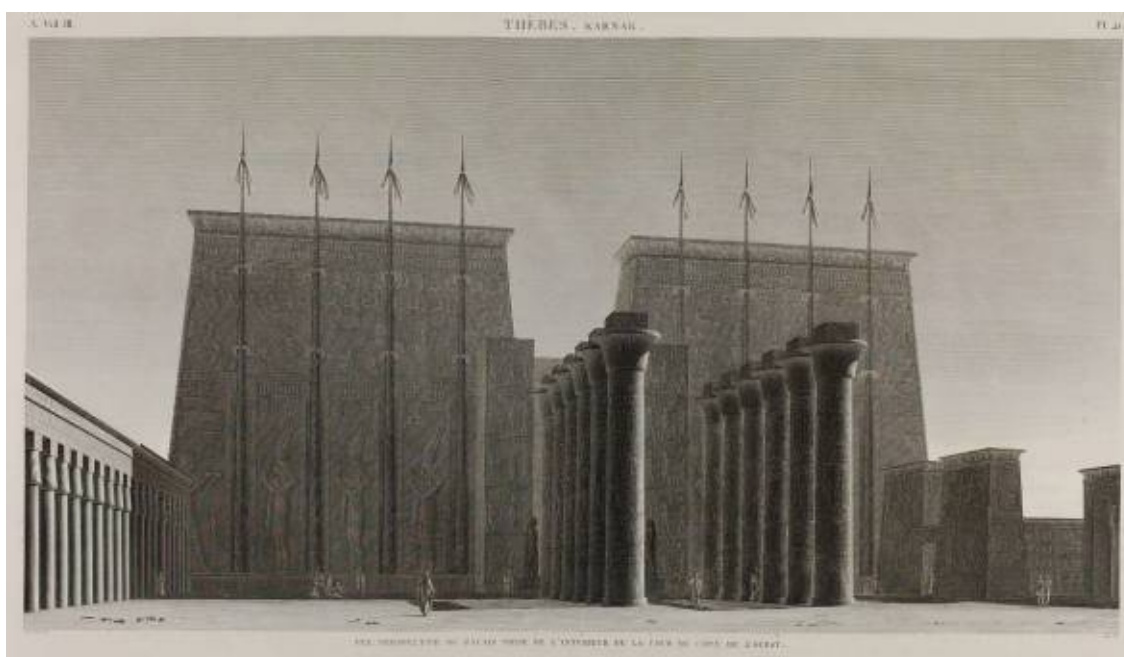
展覧会広報用に、本プレスリリース掲載の画像を用意しております。  
ご利用いただける際は、問い合わせ先までご連絡下さい。

## 展 示 構 成

### I. 空想の古代 Part1 エジプトへの憧憬

➤ 『<エジプト誌>古代篇』より遺跡の様々な復元図(18~19世紀)

遙か紀元前 3000 年前にまでたどる古代エジプト文明。ピラミッドやスフィンクスに象徴されるその遺構は幾多の謎を秘めてたたずみ、今も私たちの心をひきつけます。古代エジプト文明は古代ローマ帝国の時代からルネサンスを経て現代まで、西欧の人々の好奇心をも強烈にかきたてるものでした。オベリスクに刻まれた象形文字の解読に取り組んだ人々は数知れません。そんな何世紀にもおよぶエジプトへの憧れを背景に、ナポレオンは大勢の学者や画家からなる調査団を引き連れてエジプト遠征にのぞみました。地中海の要衝エジプトの覇権をめぐるフランスとイギリスの戦いはフランス軍の敗走に終わり、“ロゼッタストーン”などの重要な発掘物もイギリスの所有となってしまいました。しかしナポレオンは学術調査団の成果を『エジプト誌』と呼ばれる大型版画集として後世に残したのです。大判の銅版画 900 葉近くからなる『エジプト誌』は博物篇、当代篇、地図と多岐にわたってエジプトを記録していますが、もっとも力が入っているのが古代篇です。本展ではその古代篇より空想復元図を中心に展示いたします。そこには 18 世紀末のフランスの画家たちの目に映った古代エジプトの遺跡と、それを手がかりに空想によって築きあげた壮大な建造物とが残されています。



1) 「テーベのカルナック宮殿」1812 年刊 エッチング 町田市立国際版画美術館

### <ピラミッド幻想> 阿部 浩 (1946 - )

巨大な建造物の代表といえまず思い浮かぶのがエジプトのギザにあるピラミッドでしょう。『エジプト誌』においても熱心に調査され描かれました。数千年の歳月に耐え、今も存在するピラミッドは空想の産物ではありません。しかし古くから人々は、神秘的な知恵の源泉をピラミッドに、そして古代エジプト文



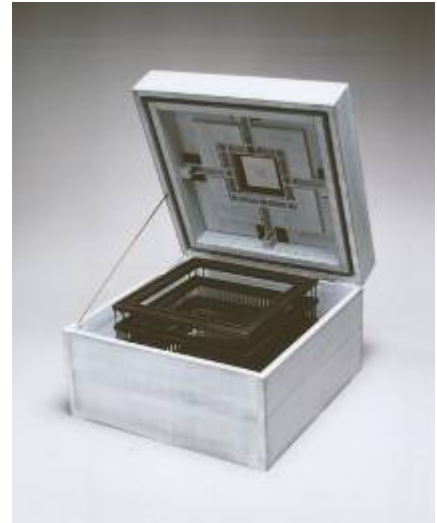
明に求め、さまざまなインスピレーションを受けてきたことも事実です。ここでは、ピラミッドという四角錐の形状が多様に展開されて生まれる幾何学的構成の作品を紹介します。石版石によるリトグラフの実践にこだわる阿部浩の作品です。

2) 阿部浩「透明なピラミッドあるいは赤い構築物」

1984 年 リトグラフ 足利市立美術館

## II. 脳内に構築せよ、空想の伽藍を コイズミアヤ (1971-)

小さな箱の中をのぞき込む、するとそこに何かがある。機械のようだが機械ではない、何かの構造物なのではないでしょうか。それをなんと呼んだらよいか、誰も知りません。そして、ひたすら、じっと見入っているうちにやがてそれは、巨大な構築物のようにも思えてくるのです。見るものの脳内に立ち上がる巨大な建築、それを「空想の伽藍」と呼んでみました。「私が建築をする（建物を／空間を造る）のではなく、それはここで自動的に行われている。」と述べるコイズミアヤの世界です。



3) コイズミアヤ「未知の信仰のための空の器\_meditation」1998年 作家蔵

## III. 空想の建築—その系譜—紙上の建築家たち

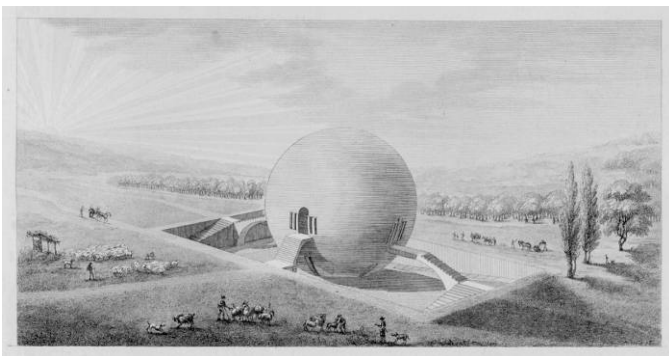
### 1. ルネサンスからバロック、そして近代へ

#### ➤ フランチェスコ・コロナ『ポリフィロの夢』1499

ルネサンス期に書かれた物語『ポリフィロの夢』には様々な建築物があらわれます。この時期の書籍のなかでももっとも美しいと賞賛される本書の、洗練された木版画の線で描きだされる空想の建築からはじまり、バロック期の劇的空間を経て19世紀まで、“紙の上”の建築群をたどります。

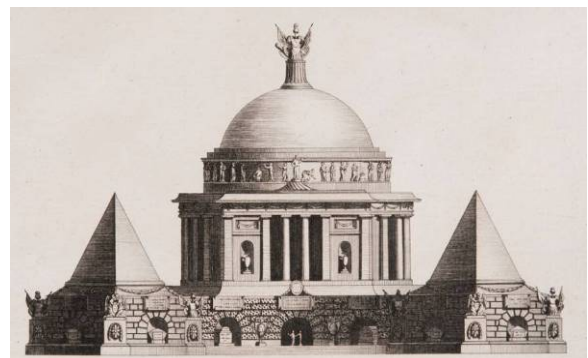


4) フランチェスコ・コロナ『ポリフィロの夢』より 1499年刊 木版  
金沢工業大学ライブラリーセンター



#### 5) クロード・ニコラ・ルドゥー

『芸術的見地から熟考された建築』より  
1847年刊 エッチング、エンブレイヴィング  
金沢工業大学ライブラリーセンター



6) ジョン・ソーン『建築のデザイン』より  
1778年刊 エッチング、エンブレイヴィング  
金沢工業大学ライブラリーセンター

## 2. 物語を紡ぎだす幻想の建築

### ➤ ジョン・マーティン (1789-1854)

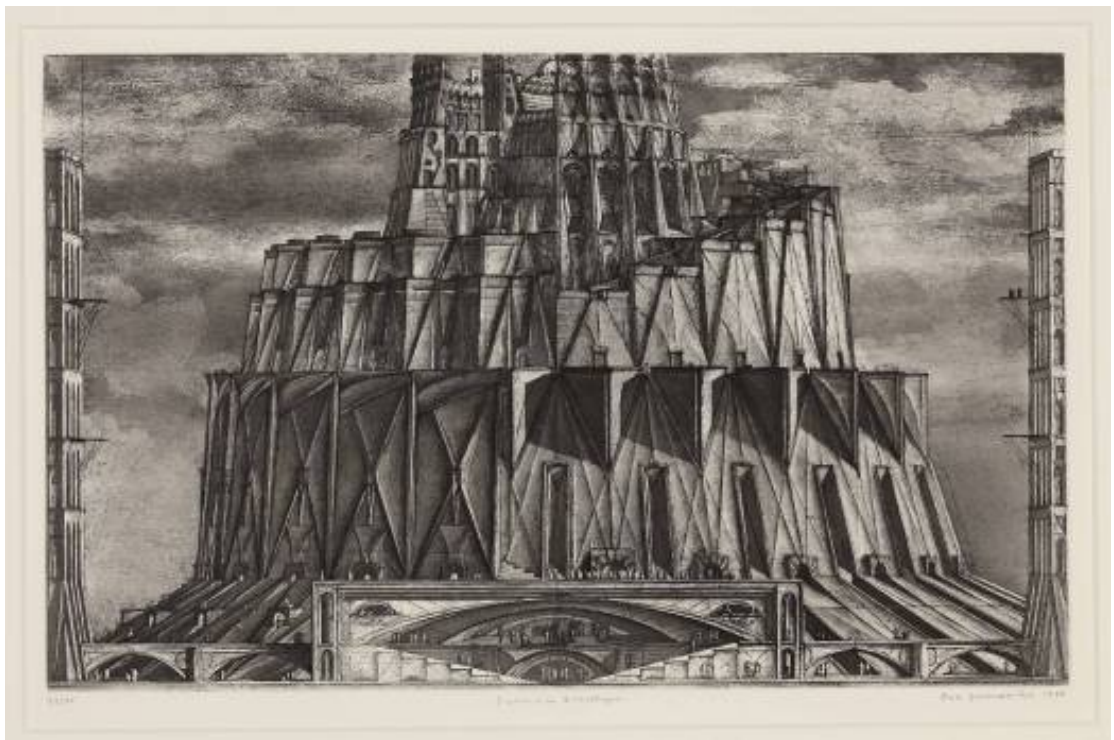
19世紀前半に活躍した画家ジョン・マーティンは、版画作品では『聖書』とミルトンの『失樂園』で知られています。マーティンがメゾチントという版画技法で生み出した崩壊するバビロンや突如として出現した万魔殿の威容を前にすると、空想の建築そのものが物語の主人公となっているかのようです。



7) ジョン・マーティン『失樂園』より「万魔殿の出現」メゾチント 1824年 町田市立国際版画美術館

### ➤ エリック・デマジエール (1948-) エッチング

現代フランスの版画家エリック・デマジエールがボルヘスの『バベルの図書館』に想を得て作り上げた版画集をご紹介します。この作品では幻惑的な建造物がボルヘスの奇譚の具現化として、世界の姿そのものとなって現れています。



8) エリック・デマジエール「バベルの塔、または図書館入り口」エッチング、アクアチント 1998年 町田市立国際版画美術館

### 3. 幻影の建築劇場

#### ➤ カール・フリードリヒ・シンケル (1781-1841)

シンケルは19世紀初頭のベルリンを中心に多くの建築を実際に手がけた重要な人物です。建築家として活躍するかたわら、モーツァルトのオペラ『魔笛』などのための舞台装置の画集も残しました。その作品集では、古代エジプトの形象や南方の密林のエキゾチックな風景などが自由に組みあわせられ、劇場という特異な空間で繰り広げられる夢幻の世界が表現されています。



9) カール・フリードリヒ・シンケル『舞台装置図集』より「魔笛 第1幕 第15場 知恵の寺院」  
エッチング、アクアチント、手彩色  
初版1819年刊 ※展示作品は1862年刊 個人蔵

### 4. 近代都市の幻想—魔都出現

- ヒュー・フェリス (1889-1962) 書籍 (印刷)
- ヤコフ・チェルニコフ (1889-1951) 書籍 (印刷)
- ルイス・ロゾウィック (1892-1973)
- ハワード・N・クック (1901-1980)

20世紀初頭、高層建築がシカゴやニューヨークで次々と建てられる時代がやってきます。現実の世界で人々が目の当たりにする目もくらむような高層ビル群を、さらに夢幻的に描き出した人々がいました。光と闇を生み出すスカイスクレイパーの姿は空想的な誇張によりさらに印象的な近未来の巨大都市となり、『バットマン』に登場するゴッサムシティなどをはじめとするアメリカンコミックのイメージの源泉ともなっています。



10) ハワード・N・クック「マンハッタン南端部」リトグラフ 1930年  
町田市立国際版画美術館

#### IV. 空想の古代 Part2 ピラネージの見た夢—壮麗なローマ

➤ ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ (1720-1778)

18世紀の版画家にして建築家、そして考古学者でもあったイタリアのピラネージにとって、古代ローマの建築群の壮麗な姿こそが理想でした。そのピラネージが制作した『ローマの古代遺跡』はローマに残る遺跡の調査にもとづいて作られた版画による報告書ともいべきものでした。そこには現実に即した詳細な記録的な描画がある一方、現実には存在せず、ピラネージが「こうあるべき」と考えた理想の古代ローマも同時に描かれています。



11) ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ「古代ローマのアッピア街道とアルデアティーナ街道の交差点」  
エッチング 1756年刊 町田市立国際版画美術館



12) ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ「牢獄 XIV」エッチング 1761年刊 町田市立国際版画美術館

## V. 逍遙せよ、空想建築の森を 野又 穫 (1955-)

一貫して空想の建築をテーマとして描きつづける野又穫(のまた・みのる)。1980年代から最新作であるピラネージへのオマージュ三連作までを含む35点の作品を当館第2企画展示室で展示します。目の前に次々と立ちあらわれる多様な空想の建築のあいだを逍遙する時、人はどんな世界を想像するのでしょうか。ユートピアかディストピアか…。イメージーションを果てしなく掻き立ててやまない稀有な作品群がここにあります。



左：13) 野又 穫「遠景-3/Skyglow-H3」2008年 アクリル、キャンバス 群馬県立近代美術館寄託

右：14) 野又 穫「光景-1/Skyglow-V1」2008年 アクリル、キャンバス 作家蔵

~~~~~  
同時開催 常設展示室 特別展示

空想の建築展 関連企画

『ELEMENTS - あちら、こちら、かけら』 野又穫ドローイング展

4月13日(土) - 6月16日(日) (常設展示室ミニ企画/入場無料)



『空想の建築』展開催期間中、出品作家の一人である野又穫(のまた・みのる)のドローイング展を開催します。野又穫(1955年生まれ)は東京藝術大学美術学部形成デザイン科を卒業後、1986年に初の個展を開催し、現在まで一貫して空想の構造物をテーマとして描いてきました。古代の遺跡のような石造りの建築から、風をはらんで飛び立ちそうな何か、巨大な水槽や植物が繁茂する温室のようなもの、天をめざすバベルの塔、妖しい光の建造物などまで、多様なその作品群は見るものを異次元へと誘う不思議な魅力に満ちています。

この展示ではその野又ワールドのいわば原型とも呼ぶべきドローイング約80点をご紹介します。これらは約2年近くにわたり、朝日新聞に挿画として連載されてきたものの原画ですので、あるいは見覚えのある方もいらっしゃるかもしれません。

未曾有の被害をもたらした先の東日本大震災が私たちの心にも計り知れない爪あとを残したことは紛れもない事実です。野又穫も構造物のすさまじい破壊に触れ、一時は描くことから遠ざかってしまうほどの衝撃を受けたといいます。奇しくも震災直前から描きはじめられたこれらのドローイングには作者の逡巡する思索の軌跡がはからずも示されることになりました。また同時にそこには、今後の展開を予兆する新たな可能性も内包されているのです。

(展示作品は当館収蔵品ではありません。)